

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12361

研究課題名（和文）「民族芸術」の生成過程 中国雲南省麗江におけるトンパ教文化の資源化と観光

研究課題名（英文）The Process of Ethnic Art Generation--Tomp Culture to be Resources with Tourism in Lijiang, Yunnan Province, China

研究代表者

高 茜 (GAO, QIAN)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・外来研究員

研究者番号：90836404

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、中国麗江ナシ族の伝統文化が現代アートの領域にどのように継承されたかに明らかにすることである。通信・文献資料で現地の動きの理解を進める一方、日本における麗江文化の理解、文化交流の実態調査を実現した。1994年の麗江地震をきっかけに始まった日本と麗江の民間交流について、ナシ族トンパ象形文字が書道やデザイン作品にとり上げられたことを明らかにし、その「アートの越境」の文脈に焦点を当てて論文にまとめた。また、麗江における「ナシ族木彫芸術」の実態、とりわけその芸術的造形について論文で記述することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、観光・グローバル化の時代において文化遺産や伝統造形文化が各地域文化の影響を受け、再構築されることは一般化している。その一事例となる本研究は、現在と将来の文化共生、文化理解に貢献するものと考えている。また、本研究を通じて日中の民間の友好的な関係および芸術文化交流の動きを記録することができた点は価値のあるものである。さらに、造形理解、とりわけ日本へ「越境」した民間芸術について造形の美的な起源、および、その再創作について考える機会ともなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to shed light on how the traditional culture of the Naxi people of Lijiang, China, has been inherited into the contemporary art domain. While promoting an understanding of local movements through correspondence and literature, we also realised an understanding of Lijiang culture in Japan and a survey of the actual situation of cultural exchange. Regarding the private exchanges between Japan and Lijiang that began after the Lijiang earthquake in 1994, the paper focuses on the context of 'art crossing borders' by revealing that the Naxi Tongpa hieroglyphs were often featured in calligraphy and design works. I also attempted to describe the actual situation of 'Naxi woodcarving art' in Lijiang, especially its diverse artistic forms.

研究分野：デザイン・工芸、視覚文化・デザイン史、文化遺産、物質文化

キーワード：造形、アート越境、木彫、文字意匠、観光、無形文化遺産、民藝、文化交流

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2000 年前後からは、日本においても書道・デザイン意匠に中国ナシ族の伝統文化であるトンパ象形文字が使われ、一般人々にも知られるようになった。ナシ族の伝統トンパ文化は、1990 年代の麗江(ナシ族居住地)の観光発展に伴い、観光市場の土産品の意匠に取り入れられた。2006 年以降は、中国国家・地域の無形文化遺産にトンパ文化と関連した複数の項目が登録され、さらに注目が高まった。このような文化的背景を踏まえ、2019 年、文化遺産・デザイン史の事例研究の対象とした研究を計画した。しかし、2020 年、研究開始の時点から新型コロナウイルスの蔓延に伴い、麗江へフィールドワークを実現することができなかったため、日本で研究・考察が可能な対象を増やす方向で研究を進めることとした。

2. 研究の目的

(1) フィールドワークの対象地域や研究計画を調整した後は、東巴文化を通じた日中交流、およびトンパ文化の日本への越境過程、とりわけデザイン・書道などアート関係する領域の動きの概貌を把握することを新たな目的として立てることとした。

(2) ナシ族木彫芸術は、伝統のトンパ文化と関わりながら発展してきた。その地域の無形文化遺産の「木彫」が現代「民族芸術」として見出され、発展してきた過程を明らかにし、さらにその芸術的造形の特徴を中心に考察することも、本研究の目的の一つである。

3. 研究の方法

(1) 日本への文化越境について、研究所や博物館など機関への麗江と日本の間での人的文化交流・訪問の実態について調査した。さらに、日本におけるトンパ文化に関する芸術面の活動について、当事者、関係や地域への訪問し、研究を進めることができた。

(2) 麗江木彫について、文献資料をおさえたうえ、観光土産市場での調査、および現地の学者や木彫従業者・無形文化遺産伝承者の資料提供、インタビューやメディアの報道など資料をもとにまとめ、その意味について考察を行った。

4. 研究成果

公開発表した論文、学会口頭発表は以下の通りである。

(1) 論文：「中国雲南麗江における民族芸術の生成過程 —— 「トンパ木彫」土産から「ナシ木彫芸術」への道」『道具学論集』第 26 号、pp. 30-45、査読論文、2021. 3。

中国雲南省の麗江では、震災復興、世界遺産登録と観光地化の加速などの動きと呼応して、政府、観光市場、現地の人びと、移民など、様々なレベルで組織や文化の再編が起きている。本研究は、麗江ナシ族における「トンパ木彫」について、その生成から民族芸術への変容に着目し、過去 30 年間のナシ族をめぐる観光開発と文化の相互関係の一側面を明らかにするものである。

既に社会生活の中では姿を消したトンパ文化であったが、1990 年代末、土産市場においてトンパ文字を彫った木盤が登場したことをきっかけに、「トンパ木彫」ブームが起こった。文字利用や市場競争における地元保護などの論議の中、ナシ族業者の間で組織も設けられた。しかし 2010 年初頭に、政策方針の転換によりナシ族木彫店は中心市街地からの退場を余儀なくされ、ナシ族業者も激減した。ところがこの不況の中で、木彫者の数名が、麗江の無形文化財「ナシ族木彫」の伝承人として指名された。「民族木彫芸術」土産に対する姿勢は木彫者によって異なるが、現在、ナシ族木彫は再構築される過程にある。

本稿では、1980 年代末に始まるこうした動向を木彫業者、土産市場という観点から観察することで、ナシ族に関する理解を深化させること同時に、民族手工業と芸術学、資源・観光開発に関する文化人類学、デザイン史研究の理論的な発展に寄与しようとすることを試みた。

キーワード：雲南麗江、トンパ木彫、観光土産、民族芸術、無形文化財伝承人、資源化

(2)論文：「マイノリティ文化の越境とそのグラフィックデザインの資源化 ——日本における中国ナシ族のトンパ文字 に関する研究報告」『DNP 文化振興財団学術助成紀要』第4号、pp. 30-45、2022. 11。

2000年代初頭、日本において、トンパ（東巴）文字がポスターや既製品等の日常的なもののデザインに用いられ、「トンパ文字ブーム」とも呼ばれた現象があった。本稿は、中国ナシ（納西）族によるトンパ文字が日本へ渡ってきた経緯、その展開について、幾つかの角度から遡及することを試みた研究報告である。

1990年代後半、中国の麗江はグローバルな観光名所となり、麗江ナシ族のトンパ文字も地域シンボル、文化の象徴として取り上げられた。その後、トンパ文字経典が世界記憶遺産に認定されたことで、観光資源として大きく変容することとなった。同時期に、日本人観光客、研究者、デザイナー、書家がそれぞれの関心で、麗江を訪れていた。また、日本のメディアも大衆向けにトンパ文字を紹介し、トンパ文字のグラフィックデザイン作品も街に出現した。それらの活動が、若者の間の「トンパ文字ブーム」の形成に一役買ってきたと考えられる。1990年代から2000年代前半にかけて生じたトンパ文字の日本への越境は、グローバル観光の拡大という時代背景において、「愛嬌のある」と言われる象形文字が、人の心を動かす力をもつデザインとして、国際的に生かされた事例の一つと言える。言い換えれば、トンパ文字は、少数民族地域の文化遺産がデザイン資源として利用され、国際的文化の伝達と生成の役割を果たしてきたと言うこともできるだろう。

キーワード：観光、麗江地震、世界遺産、日中交流、象形文字、デザイン

(3)論文：「中国麗江ナシ族の木彫芸術」、『道具学論集』第29巻、pp. 48-55、2024. 3。

本記述は、『道具学論集』第26号に刊行された論文の続編である。前論文では、先行研究および関係者の陳述に基づき、1980年代末から30年余り麗江ナシ族木彫の出来事を考察した。現地の観光発展、無形文化財の保護といった時代背景において、麗江のナシ族木彫の現代的発展の流れを見ることができた。木彫を考察するにあたっては、造形・様式についての陳述は不可欠だが、紙幅の関係もあり、木彫のモデリングについて改めて考察することにした。本論では、観光土産市場において「東巴（トンパ）木彫」と呼ばれていた時期から、「ナシ族木彫」と名付けられた現在にいたる、木彫者たちの作品スタイルの変遷を見ていく。現地調査で撮影した作品、インタビューを中心に扱い、木彫作者から提供された資料を加え、視覚的な角度から木彫作品に直観的に接近し、それを理解することが目的である。ここでは、具体的な作品を見ることでグループの全体像をより広く捉え直し、麗江ナシ族無形文化財として位置付けられている木彫が表出したものについて考察する。また、本研究は、文化遺産、芸術文化の多元現象の事例としても、その意義を有するものと考えている。

キーワード：麗江、民族芸術、トンパ木彫、テーマ・モデリング、伝承人

(4)口頭発表1：

「中国のトンパ象形文字のデザイン資源化：日本への越境」日本デザイン史学研究会、2020. 12。

2003年、中国ナシ族のトンパ文字が書かれた経典が「世界記憶遺産」として認定されてから、日本ではさまざまなメディアやデザイナーの活動によって「トンパ文字」がブームとなり、「若者文化」として定着していた。本発表では、そのブームの実態や背景、その意義について考察した。

口頭発表2：

「改革開放以降におけるトンパ文字と麗江ナシ族の社会生活：観光デザイン資源から新たな民族文化へ」比較民俗研究会、2021. 3。

改革開放以降、中国雲南の麗江の観光発展と共に地域文化が揺れ動き、世界観光名所となった過程においてナシ族文化の再編を行った。トンパ文字は、伝統トンパ教から一般ナシ族文化として重要な意味をもつようになった。本発表では、その歴史的経緯について確認することにした。

口頭発表 3：

「移り変わる世界遺産と文化景観：中国雲南省麗江古城・新華街の事例から」「生きる文化遺産」研究会、2022. 1。

世界文化遺産「麗江古城」（旧市街）の「新華街」を事例として、その景観の変遷を考察する。経済発展に伴って、観光者向け店舗が増加するとともに、街頭標識、商店看板、土産商品に掲げられたナシ族トンパ象形文字が街中に出現した。本発表では、なかでも「トンパ木彫」と呼ばれ、ナシ族が新華街で創出した木彫の土産経営の登場と退場がこの地域の街路の雰囲気を変え、古城における役割も変化させたかについて、事例を基に考察した。

口頭発表 4：

「中国雲南省麗江の国際化と多言語化がトンパ文字に及ぼした多面的影響に関する考察」多言語化現象研究会、2022. 8。

本発表では、麗江大地震における日本のメディア報道、震災後の国際社会からの支援、及びトンパ文化に関心を持った人々の麗江への訪問について取り上げた。さらに国際観光名所になった麗江の街角に現れた、トンパ文字をはじめとする視覚的多言語景観について概観し、国際化によって促進された多言語学習、民族言語と関連する教育、アート活動にその影響が見られたことを指摘した。

総じて、本研究は日本と麗江の交流については、トンパ象形文字が意匠要素として、書の文字として日本へ流入していたことも確認することができた。また、麗江現地の代表的民藝「ナシ族木彫」を事例として、芸術的文化遺産の現代的発展を概観したものと言える。今後の日中民藝の比較研究へ繋がる道筋を見出すことも記しておく。

引用文献：

C・ダニエルス編 2007『知識資源の陰と陽』弘文堂。

飯田卓編 2017『文化遺産と生きる』臨川書店。

塚田誠之編 2016『民族文化資源とポリティックス・中国南部地域の分析から』風響社。

内掘基光ほか 2006『資源人類学』放送大学。

山下晋司 2009『観光人類学の挑戦「新しい地球」の生き方』講談社。

楊福泉 1998『多元文化和納西社会』雲南人民出版社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高茜	4. 巻 第29号
2. 論文標題 中国麗江ナシ族の木彫芸術	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『道具学論集』	6. 最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高茜	4. 巻 第4号
2. 論文標題 マイノリティ文化の越境とそのグラフィックデザインの資源化 日本における中国ナシ族のトンパ文字に関する研究報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 DNP文化振興財団学術研究助成紀要	6. 最初と最後の頁 86-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高茜 Qian Gao	4. 巻 26
2. 論文標題 中国雲南麗江における民族芸術の生成過程 「トンパ木彫」土産から「ナシ木彫芸術」への道	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 道具学論集	6. 最初と最後の頁 30 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高茜
2. 発表標題 中国雲南省麗江の国際化と多言語化がトンパ文字に及ぼした多面的影響に関する考察
3. 学会等名 多言語化現象研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高茜
2. 発表標題 「改革開放以降におけるトンパ文字と麗江ナシ族の社会生活:観光デザイン資源から新たな民族文化へ」
3. 学会等名 比較民俗研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高茜
2. 発表標題 「移り変わる世界遺産と文化景観：中国雲南省麗江古城・新華街の事例から」
3. 学会等名 「生きる文化遺産」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高茜
2. 発表標題 「中国のトンパ象形文字のデザイン資源化：日本への越境」
3. 学会等名 デザイン史学研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------